



平澤興 —ひらさわ こう—

明治33年新潟県西蒲原郡味方村山王生まれ。大正13年京都大学医学部卒業。新潟医科大学助教を務め、昭和2年解剖学研究のため欧米に留学、帰国後同大学教授、23年招かれて来京。京大医学部教授、26年学士院院長、31年同大医学部長、30年総長となる。38年任期満了のためより退任。42年日本士院会員、国際ロータリー-265地区(現在2650地区)ガバナー、45年第一等勲章受章。平成元年6月17日逝去。著書に「生きよ今日も喜ぶ心」(欽知出版社)、「山はむらさきき」「人間 その無限の可能性」(ともに新日本新聞社)などがある。

「君は十分頑張ったのかね。自分で頑張ったという自信があれば、それでいいんだよ」と言われれば、誰が聞きに行っても、そのようにおっしゃられるとのこと。私は思い返しても、当時の平澤先生は本当に学問に熱心な方で、しかし、一方ではそのように人々を包み込んでしまうような独特な温かみがありました。

秋、八月十五日の終戦の日が過ぎた。秋の講義中でのことでした。「職員が一枚の名刺を持って教室へ入ってきました。どこかの大学の先生が新潟を訪れ、汽車の時間として残りました。しばらくして先生は母校の京都大学へ栄転されるのではないかと噂が流れました。学生たちは、留任運動を起ごす。」などと申し出ておりましたが、翌二十一年七月、先生は京都大学へ向かわれました。結局、私が平澤先生に直接お話を交えたのは一年あがりました。しかし、同僚の名刺としての畏敬の念はその後ずっと抱き続けていたのです。

(注) 解剖学副科長職には「経路科」と「経路科」がある。例えばコップを持つ時など、肩と腕と手と眼を何よりつなげるなどのことと学習し、思うより多く動くのは「経路科」の働きによる。



白根緑ヶ丘病院理事長 佐野孝

さの たかし —昭和2年新潟西蒲原郡味方村生まれ。20年新潟医科大学専門部入学。当時同大教授だった平澤興先生の講義を受け続ける。33年医学博士、41年白根緑ヶ丘病院院長、平成元年厚生大臣表彰(精神衛生事業)、13年厚生労働大臣表彰(病院事業功労)、14-15年国際ロータリー第2590地区(新潟)ガバナー、19年旭小経営者、著書に「祈にふれ 心に刻む」(平岡堂書店)等がある。

その時、初めてあめ終開もない講義の出来をお話しました。「先先生が非常な感動の場を獲られたことが非常に感動的でした」と申し上げると、先生は「佐野君、手に手を取って当時を懐かしく感懐にいたしました。あなたのおしゃったとおりです。手に手を取って当時の懐かしく感懐にいたしました。あなたのおしゃったとおりです。手に手を取って当時の懐かしく感懐にいたしました。あなたのおしゃったとおりです。」

2010-2 2010-2

# 学に生き続けた人 平澤興

日本の神経解剖学に大きな足跡を残し、京大総長を務めた平澤興先生、その功績と信念で学問の道に生き続けた生涯は、まさに「学ぶに如かず」の一生であった。直接の教え子であり、伝記の出版や記念館の設立など、平澤先生の顕彰活動を続ける佐野孝氏に、計り知れない学恩とともに平澤先生の足跡をお話いただいた。

「学如不及、猶恐失之」を貫いたその生涯

「アメリカの科学に敗れたら我が国の再建は、また科学にすべてをよかなし。学生諸君、すくなくには皆先生、この手紙が私のもとに届いたのは、昭和二十年の終戦直後であった。同年四月に新潟医科大学(現新潟大学医学部)に入学したものの、戦局の激しきはピークに達し、初夏を迎える頃には授業もそこそこ疎閑しました。すくなくは、終戦、焼け野原を前に、もう大先生なんて終わりかと失意の日々を過ごしてしまっただけ。そんな時に、大学から先手紙が届いたので、そうして授業が再開、私はあらためて平澤興先生の講義を受ける機会をいただきました。

平澤先生は日本の神経解剖学の発展に大きく寄与された一方、後に京都大学総長を務められた方です。特に神経系の「維体外路系」(注)の研究に打ち込まれ、その働きを世界で初めて実証された当時平澤先生は三十代後半、最も働き盛りの頃で、その講義は私にとって非常に身の引き締まるよ

頑張った自信があれば それでいい